

新課程版高校検定教科書における 英検 Can-do リストと関連のあるタスク

共同研究

長野県／信州大学 助教 田中 真由美
申請時：新潟県／長岡工業高等専門学校 准教授

概要

本研究では「英検 Can-do リスト」、英語教科書に見られるタスク、そしてパフォーマンス評価の関係を明らかにし、教材、指導そして評価のあり方について示唆を得ることを目的として2つの調査を行った。調査1では、「コミュニケーション英語Ⅰ」と「英語表現Ⅰ」の検定教科書における「英検 Can-do リスト」と関連のあるタスク数を調査した。その結果、教科書内の「書く」タスクと「話す」タスクのほとんどが「英検 Can-do リスト」の「まとめ表現」と関連することがわかった。調査2では教科書のタスクが英語の授業でどのように修正されているかを調べた。教科書のタスクはそのまま使われるのではなく、話題の修正やパフォーマンス評価基準の設定により生徒の実生活や英語力に合った難易度に変えられることがわかった。

1

研究の背景

平成25年度より実施されている高等学校学習指導要領では、「コミュニケーション英語基礎」、「コミュニケーション英語Ⅰ」、「コミュニケーション英語Ⅱ」、「コミュニケーション英語Ⅲ」、「英語表現Ⅰ」、「英語表現Ⅱ」、「英語会話」が各学科に共通する科目として編成された。高等学校外国語科で英語を履修する場合には、「コミュニケーション英語Ⅰ」が必修科目となり、その他の科目は選択履修させる科目となった（文部科学省、2010）。

文部科学省が設置した「外国語能力の向上に関する検討会」によって取りまとめられた「国際共通語

としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」（文部科学省、2011）において、生徒に求められる英語力の達成状況を把握・検証することが提言された。これを受けて、「CAN-DO リスト」の形で英語の学習到達目標を設定することが各中・高等学校で求められた（文部科学省、2013）。教師は卒業時および学年ごとの学習到達目標を明確にするだけでなく、指導と評価のあり方を改善することも期待されている。さらに具体的施策として、積極的に外部検定試験などを活用し、生徒に求められる英語力の達成状況を把握・検証することも提案された（文部科学省、2011）。実用技能英語検定（以下、英検）も今後ますます活用されると考えられる。

そこで本研究では、検定教科書内に「英検 Can-do リスト」（英検、2006）と関連するタスクが多ければ、授業の中で生徒の英語運用能力を伸ばすための活動が頻繁に行われると考え、教科書内のタスク数を調査した。また、「英検 Can-do リスト」の授業での活用の可能性や問題点を明らかにするために、教科書内のタスクを行った生徒のパフォーマンスがどのような評価基準で測定されているかインタビュー調査も行った。本研究の目的は、生徒が積極的にコミュニケーションを図り、情報発信する能力を育成するにはどのような教材、指導および評価が必要かという教育的示唆を得ることである。

2

先行研究

2.1 「英検 Can-do リスト」の妥当性

「英検 Can-do リスト」は、英検の合格者に対し

て「英語使用に関する自信の度合い」に関する調査を行い作成されたものである。

竹村（2008）は「英検 Can-do リスト」の英検 3 級と準 2 級の「書く」技能のリストに挙げられた項目に関するライティングタスクを作成し、英検 3 級と準 2 級の合格者に与えた。日本人英語教師 2 名とカナダ人教師 1 名が「タスク完成度」と「正確さ」の 2 つの観点で作成した 5 段階の採点スケールを用いて評価した。また、調査対象者の自信の度合いも見するために、「英検 Can-do リスト」の「Can-do 表現」と同じ表現を用いてアンケート調査した。結果として、すべての項目に関するタスクが達成されたわけではないが、自信がある場合には、ある程度のライティングのパフォーマンスを発揮できた。

臼田（2009）は英検準 2 級取得者に対して、「話す」技能に関するスピーキングタスクを与えた。この調査では準 2 級の「話す」技能に関する 4 つのタスク（英問英答 2 問、ロールプレイ 2 問）を与え、日本人教師とアメリカ人英語教師の 2 名が英問英答タスクに対して情報量と表現方法の 2 つの観点から分析的に評価した。ロールプレイタスクに関しては情報量と表現方法を統合的に評価した。その結果、1 つの英問英答タスクを除いた 3 つのタスクで高い達成率が見られ、「英検 Can-do リスト」の妥当性が高いことが示された。

以上の研究から「英検 Can-do リスト」の妥当性が示された。竹村や臼田が作成したタスクが達成できるようになれば、英検の 3 級や準 2 級に合格できるというわけではなく、英検における採点基準とは多少ずれがあるため、タスクを行うことが直接的な試験対策になるわけではない。しかし、「英検 Can-do リスト」と関連のあるタスクを行い達成することで、教師が生徒の能力を把握できるだけでなく、生徒自身が実際の英検取得者と同等の技能があるという自信を持つことができると考えられる。

2.2 検定教科書

時事通信社（2013）によると、1 社が「コミュニケーション英語基礎」の教科書を、12 の出版社が「英語表現 I」の教科書を平成 25 年度の採択に向けて発行した。「コミュニケーション英語基礎」の採択冊数は 72,504 冊であり、「英語表現 I」の教科書採択冊数は、「コミュニケーション英語 I」の採択冊数（1,220,673 冊）の約半数である 661,822 冊であった。

多くの学校が「英語表現 I」を 1 年次の履修科目として設定しており、カリキュラム上で重要な位置づけにしている。

「コミュニケーション英語 I」では 4 技能を統合的に扱い、基礎的なコミュニケーション能力を育成することが求められ、「英語表現 I」では論理の展開や表現方法を工夫して話したり書いたりする言語活動が行われる（文部科学省、2010）。「CAN-DO リスト」の形で示される学習到達目標においては、前者の評価の観点は「外国語表現の能力」と「外国語理解の能力」であり、後者の評価の観点は「外国語表現の能力」となる。どちらの科目においても、生徒の「外国語表現の能力」を育成することは必須であり、実際に話したり、書いたりする活動を授業に取り入れ、その技能を評価しなくてはならない。

新しい検定教科書では、「外国語表現の能力」を伸ばすための工夫がされている。例えば、ある程度自由に自己表現のできる課題などが多く含まれている。教師がオリジナルの課題を作成したり、課題の内容やレベルが生徒に合わなかったり、時間がなかったりと、それらが授業の中ですべて行われるわけではない。しかし、教科書に「外国語表現の能力」を伸ばすような適切なレベルの課題が数多くあれば、教師は適宜選択して使用することも可能であり、教室の中で表現活動が行われる頻度も高くなると期待できる。

2.3 タスク

高島（2005）は「コミュニケーション活動」を、「教室外で英語を使用できるようになるためのシミュレーション的な言語活動」ととらえ、「タスク」、「タスク活動」、「タスクを志向した活動」に分類している。「タスク」の定義として、言語を使う目的、意味内容の伝達、話し手間の情報や考えの差、学習者の主体的な言語使用の 4 点を挙げ、さらにタスクをメッセージに焦点を当てたタスク（Unfocused Task）と特定の文法構造の使用に焦点を当てたタスク（Focused Task）に分類している。「タスク活動」は構造シラバスに基づいて構成される教科書で指導することが前提となっており、会話の進行を段階的に指示し、2 つ以上の似通った構造を比較させる点において「タスク」とは異なる。「タスクを志向した活動」では、指定された文法構造や語彙、モデル・ダイアログを用いる点が「タスク」や「タスク活

動」と異なる。

松村（2012）は、教科書内の練習活動も、アレンジを加えてタスクに変えることを提案している。教科書の各ユニットで登場する特定の文法項目を使用して文を産出する練習問題であっても、生徒が自由に表現できればタスク化が可能である。実際に教科書内の活動をそのまま行うよりも、生徒に合ったアレンジを加える教師も存在し、本研究ではそのようなタスク化可能な自己表現課題も「外国語表現の能力」を伸ばす可能性のあるものとして扱った。

3

研究目的

本研究では「英検 Can-do リスト」、英語教科書に見られるタスク、そしてパフォーマンス評価の関係を明らかにし、「外国語表現の能力」を育成するために必要な教材、指導そして評価のあり方について示唆を得ることを目的とした。

調査1 新課程版高校英語検定教科書に「英検 Can-do リスト」の「話す」技能と「書く」技能に関する級別の「まとめ表現」と関連のあるタスクの数はどのくらいあるか。

調査2 高等学校の英語の授業で、新課程版高校英語検定教科書内のタスクがどのように扱われているのか。

「まとめ表現」とは、「英検 Can-do リスト」内にある各技能の最初に太字で示された Can-do 表現のことを指す（資料2）。例えば、英検3級の「話す」技能の「まとめ表現」は「身近なことについて簡単なやりとりをしたり、自分のことについて述べることができる」である。また、「タスク」と判断しない課題は、答えがおおむね1つに限定され、自己表現の要素のない空所補充、語句整序、文結合、書き換え、正誤判断、英問英答、ディクテーションなどの課題である。

4

調査 1

4.1 分析対象

分析対象は、平成25年度発行の「コミュニケーション英語Ⅰ」（26冊）と「英語表現Ⅰ」（17冊）の検定教科書である（資料1）。

4.2 分析手順

分析は本研究代表者と共同研究者の2名で以下の手順で行った。

(1) 予備調査として、「コミュニケーション英語Ⅰ」と「英語表現Ⅰ」の教科書をそれぞれ3冊ずつランダムに選び、分析者2名が計6冊の教科書内の最初の3ユニットにあるタスクについて「英検 Can-do リスト」との一致作業を行った。まず、「英検 Can-do リスト」の「まとめ表現」を参考に、下位にある Can-do 項目に含まれる話題や場面と行動を示す表現と一致するタスクを抽出した。例えば、英検3級の「話す」技能の下位項目「自分の好きなことについて短い話をすることができる（趣味、クラブ活動など）」の話題は「自分の好きなこと（趣味、クラブ活動など）」であり、行動は「短い話をするることができる」である。これは準2級の「話す」技能の下位項目の話題「興味・関心のあること（好きなスポーツ、趣味に関することなど）」と行動「自分の考えを述べることができる」と類似している。タスクの話題が類似しており級の判別が難しい場合は、「まとめ表現」の下位項目に見られるレベルを示す表現に基準を設けてタスクを分類した。例えば、3級の「話す」技能の下位項目には「短い」という表現が使用されていたため、教科書内のタスクで1～3文を要求している場合は3級とした。自分の考えを述べるために3文以上を産出することが必要なタスクは準2級とした。

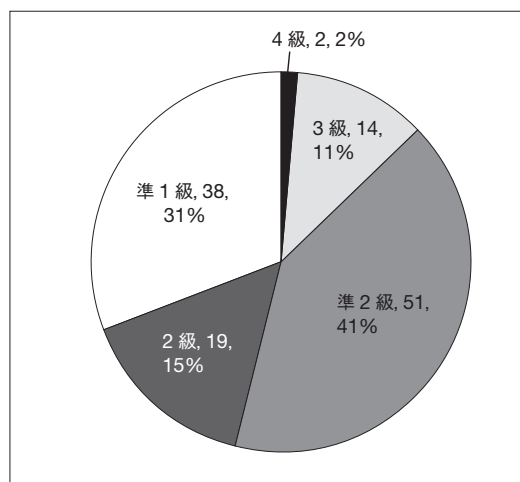
分析者2名の分析が異なった点については協議を行った。主な協議事項は、プレゼンテーションやスピーチのタスクを「書く」技能に入れるか、「話す」技能に入れるかであった。これらのタスクは、発表原稿を書いてから話す場合が多く、教科書内のほとんどのタスクが「書く」と「話す」の両方のタスクになってしまう。本研究では、最終的なパフォーマンスを判断材料とし、プレゼンテーションやスピーチを「話す」タスクとして分類することにした。同

様に、同一のテーマに関していくつかのステップを経るその他のタスクも、最終的な原稿やパフォーマンスを判断材料にした。また、タスクが判別できない場合は、「分類不可」というカテゴリーに入れることとした。「分類不可」としたものは、俳句の創作やスキットを作って演じる創造的なタスクや、自己表現の要素はあるものの話題に日常性や社会性のないタスクであった。

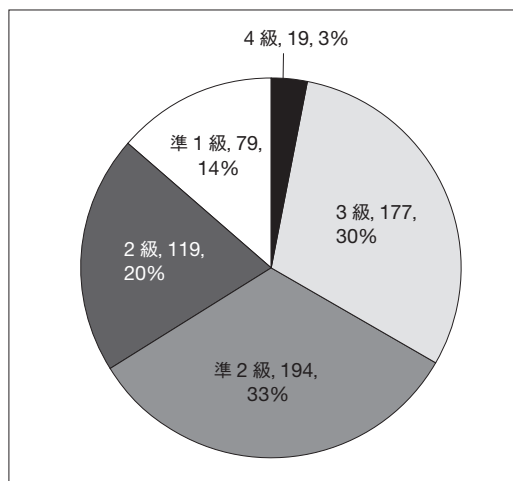
(2) 本調査では、教科書を半分に分け、分析者2名で分担して(1)と同様の手順で分析した。

4.3 結果と考察

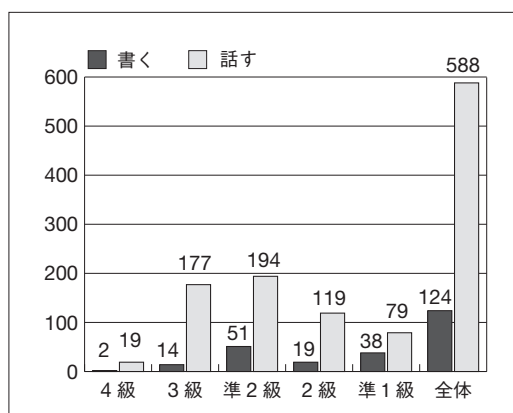
「コミュニケーション英語Ⅰ」における技能と級別のタスク数とその割合は図1～3である。「書く」タスク(図1)では、「英検 Can-do リスト」における準2級レベルの割合(41%)が最も高く、次に高かったのが準1級レベルのタスク(31%)であった。「話す」タスク(図2)では最も割合の高い準2級(33%)に次いで、3級が30%、2級が20%であった。どの級においても「話す」タスクの方が「書く」タスクよりも多かった(図3)。「分類不可」タスク数は図示していないが、39個あり、全タスク数(712個)の約5%であった。



▶ 図1:「コミュニケーション英語Ⅰ」における級別の「書く」タスクの個数と割合

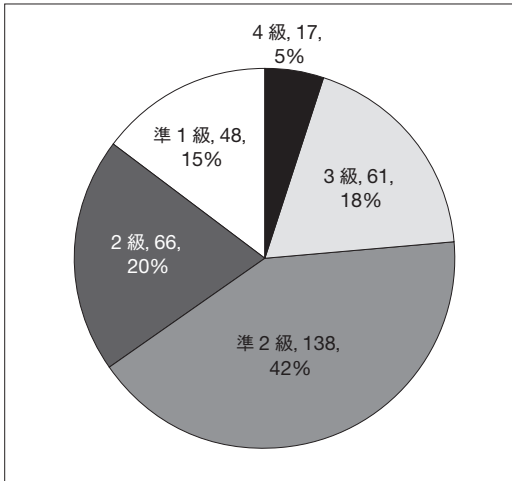


▶ 図2:「コミュニケーション英語Ⅰ」における級別の「話す」タスクの個数と割合

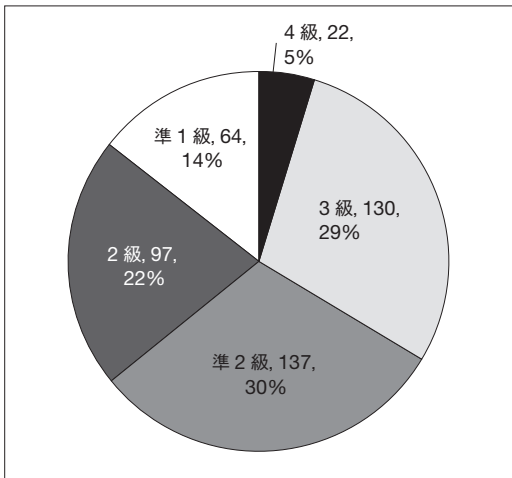


▶ 図3:「コミュニケーション英語Ⅰ」における「書く」タスクと「話す」タスクの個数の比較

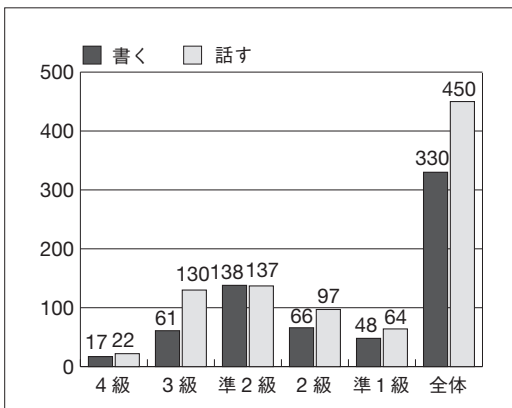
図4～6は「英語表現Ⅰ」における技能と級別のタスク数とその割合である。「書く」技能に関しては、準2級のタスクの割合が42%と最も高く、次いで2級(20%)、3級(18%)であった(図4)。「話す」技能のタスクは、準2級(30%)と3級(29%)がほとんど同じ割合で、2級が22%であった(図5)。「話す」タスクの方が全体的には多いが、準2級のタスクはほとんど数に違いがなかった(図6)。「分類不可」タスク数は40個であり、全タスク数(780個)の約5%であった。



▶ 図4: 「英語表現Ⅰ」における級別の「書く」タスクの個数と割合



▶ 図5: 「英語表現Ⅰ」における級別の「話す」タスクの個数と割合



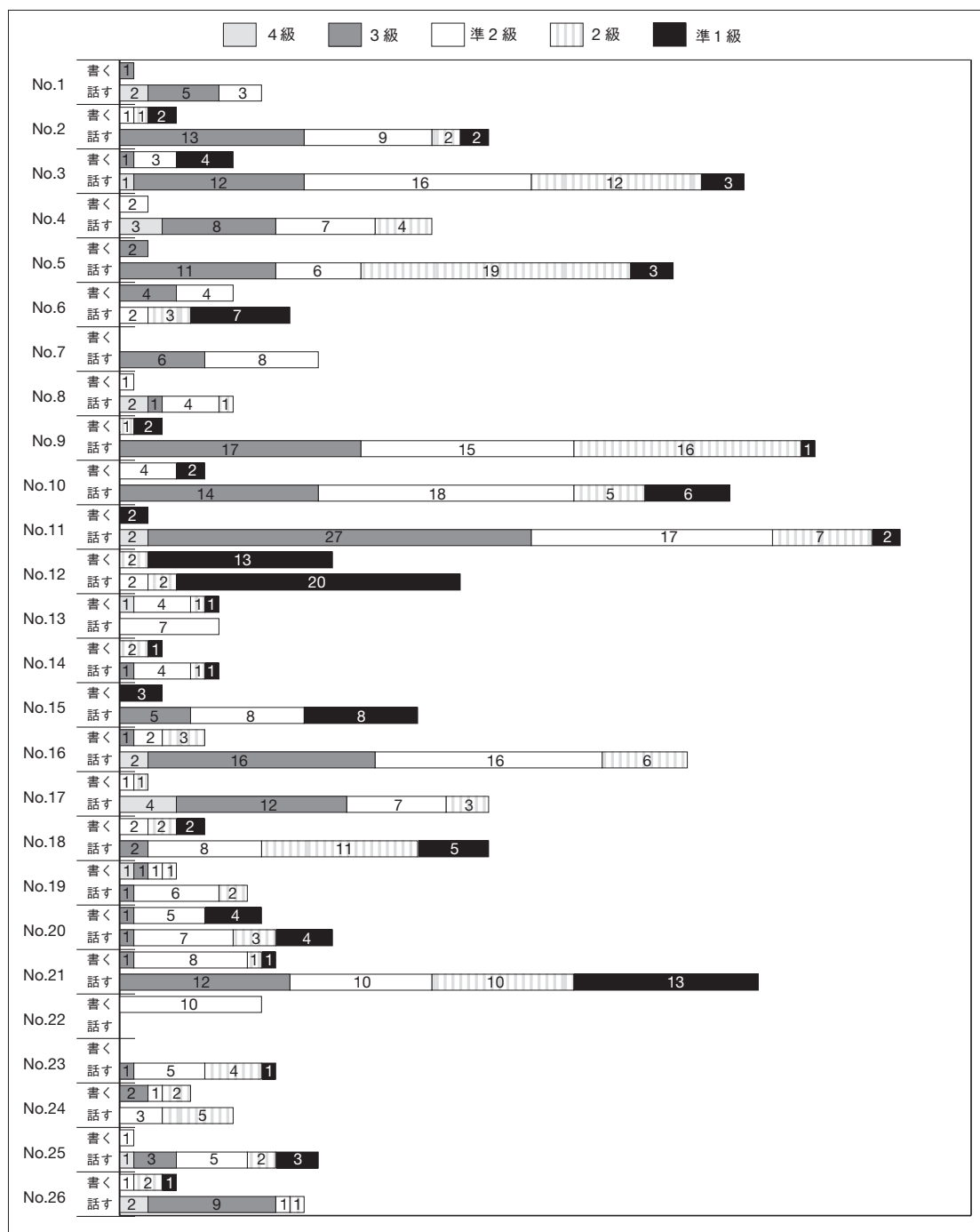
▶ 図6: 「英語表現Ⅰ」における「書く」タスクと「話す」タスクの個数の比較

図7は「コミュニケーション英語Ⅰ」、図8は「英語表現Ⅰ」の教科書別タスク数である。

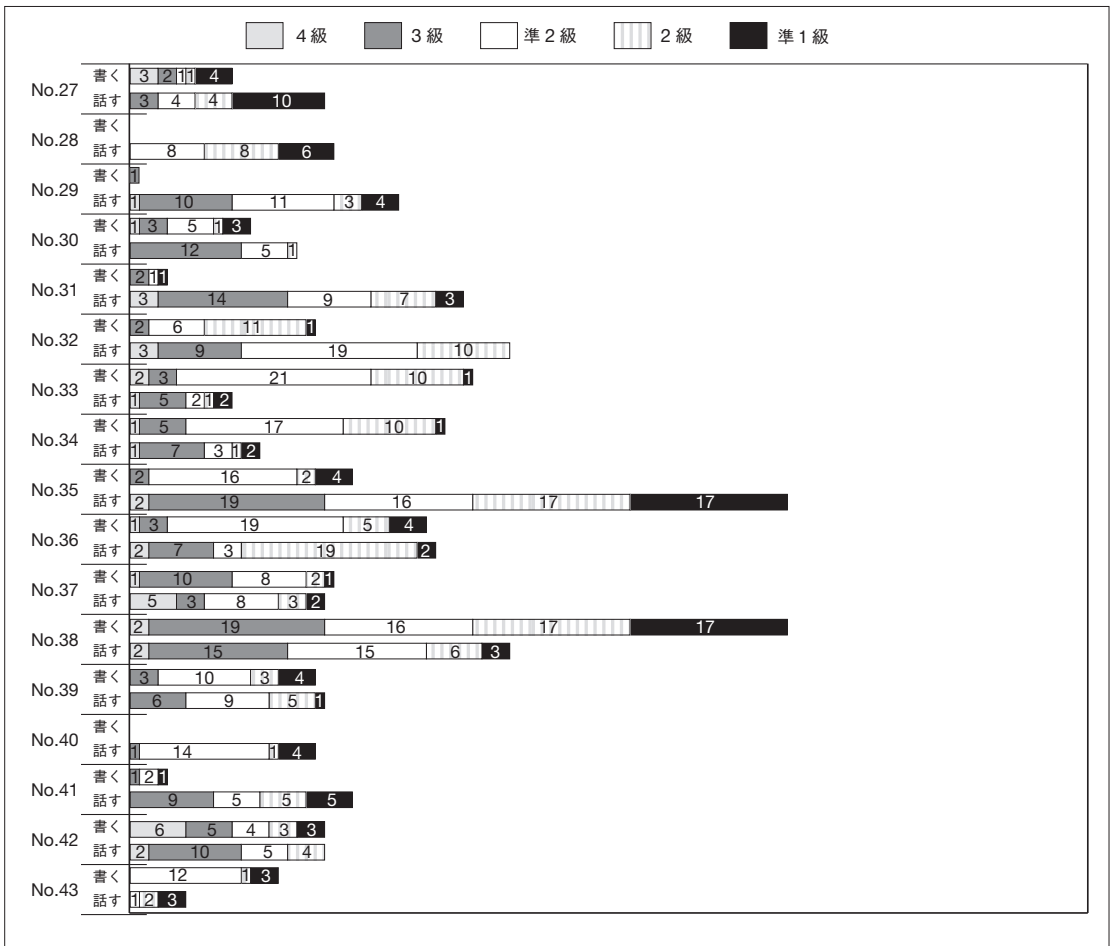
第1に、タスクのレベルについて考察する。英検2級は高校卒業程度という位置づけである。しかし、教科書には準1級レベルのタスクも含まれていた。特に「コミュニケーション英語Ⅰ」の「書く」技能のタスクでは、2級レベルよりも準1級レベルのタスクの方が多かった。理由としては、「コミュニケーション英語Ⅰ」の教科書が旧課程の「英語Ⅰ」の教科書と同様に「読むこと」を中心に構成されているからである。読む題材として比較的高度な社会的内容のトピックが扱われ、読解後の「書く」タスクのレベルは高くなる。準1級の「書く」技能の「まとめ表現」は「日常生活の話題や社会性のある話題についてまとまりのある文章を書くことができる」であり、要約や意見を書くタスクもこれに含まれる。

次に技能について考察する。「コミュニケーション英語Ⅰ」と「英語表現Ⅰ」で「書く」技能よりも「話す」技能のタスクの方が多かった。これは、本研究がタスクの最終成果を分類の対象としたことが関係している。最終的に口頭で伝えることを目的としたタスクは「話す」タスクに分類したため、「話す」技能のタスクの中には「書く」行為も含まれている。

最後に、教科書別のタスク数について考察する。「コミュニケーション英語Ⅰ」では、「英検 Can-do リスト」の準1級レベルのタスクを多く含むものもあれば、どの級のタスク数も同じくらいのものもあり、教科書間で大きな違いがあった。「英語表現Ⅰ」では、タスクの総数に教科書間の違いはあるが、特定の級のタスクが多いという傾向は見られない。「コミュニケーション英語Ⅰ」と異なり、「英語表現Ⅰ」は生徒にとってより身近な場面がタスクに設定されていると考えられる。



▶ 図 7 : 「コミュニケーション英語 I」教科書別タスク数



▶ 図 8 : 「英語表現Ⅰ」教科書別タスク数

4.4 調査 1 のまとめと課題

調査 1 では、ほとんどすべての「書く」および「話す」タスクが「英検 Can-do リスト」に基づいて分類できたことから、新課程版教科書内のタスクはリストと関連があることがわかった。また分析の結果、リストの準 1 級レベルの「書く」タスクが「コミュニケーション英語Ⅰ」の教科書に入っていることがわかった。英検準 1 級合格者が実際に「英検 Can-do リスト」の準 1 級の項目をできるかどうか検証はされていないが、英検 2 級を合格した生徒は、教科書内の準 1 級相当のタスクに取り組むことで次の目標への見通しを持つことができる。しかし、「コミュニケーション英語Ⅰ」は多くの学校で高校 1 年次に行われるため、教科書内のタスクそのままでは 1 年生には難易度が高すぎる可能性がある。

調査 1 のタスク分類は「英検 Can-do リスト」の「～について…できる」という「話題」と「行動」

の表現に基づいているが、「簡単な文章」などのレベルにかかわる表現には解釈の幅があり、教室で教科書内のタスクを行う際、教師は産出する文の量に制限を設けタスクの難易度を変える場合がある。例えば、「英検 Can-do リスト」の準 1 級レベルの「書く」タスクも、文の長さを調節したり、評価基準を低く設定すれば、目の前にいる生徒の能力に合ったものに変えられる。そこで、調査 2 では、教科書内のタスクが教室でどのように扱われ評価されているのかについて調べた。

5

調査 2

5.1 調査対象

高等学校の「英語表現Ⅰ」を担当する 2 名の英語科教諭にタスクについての質問調査を行った。本調

査では協力者が2名と少人数のため結果を一般化できない。2名の教諭の経験を事例として扱い、教科書内のタスクの持つ可能性や「英検 Can-do リスト」との関係性を考察した。

5.2 調査方法

実際に使用した教材やタスク、ワークシートなどを手元に置きながら詳しく話ができるよう、インタビュー形式で行った。インタビューでは、用意した質問を基に話を展開したり、追加の質問のできる半構造化インタビュー法 (semi-structured interview) を用いた (Dörnyei, 2007, p.136)。

5.3 結果

5.3.1 事例 1

県立高等学校普通科・1 学年・1 クラスの生徒数30 名程度・英語表現 I

教科書：BIG DIPPER English Expression I (数研出版)

生徒の英語のレベル：英検 4 級～準 2 級

A 教諭は普段の授業で文法事項の説明と練習問題の解答、解説を行った。ライティングのタスクは、月に1 回程度の頻度で宿題として与えた。この宿題には教科書の各レッスンにある「Express Yourself!」を主に使用したが、ALT が生徒の現実に合わず、つまらないと判断したため、別のタスクに変えることもあった。例えば、友達に英語でEメールを送るタスクは現実感がないが、日本の文化や季節など身近な話題は生徒が書きやすいものであると判断した。

ライティングのタスクの評価は主に ALT が担当した。タスクの目的は授業で習った文法事項をできるだけ使いながら自己表現ができるようになることであり、以下の評価基準で評価した。

評価基準：内容 5 点、文章の長さ (word 数) 5 点 (合計10点満点)

評価の例：内容は以下の条件で ALT が主観的に評価した。

- ・内容が理解できるかどうか。
- ・文の構造が複雑であるかどうか。
- ・誤りがあまりにも多いときは1 点減点
- ・箇条書きの場合は低めの点数

文章の長さは以下のような基準で評価した (タス

クごとに目標 word 数は変えた)。

- ・45 words 以上 (5 点), 40–44 words (4 点), 30–39 words (3 点), 20–29 words (2 点)

A 教諭は生徒に意欲を持って英文を書いてもらいたいとしたいに思うようになり、文法事項を細かく評価しないようにした。内容に関するコメントを加えて提出課題を生徒に返却したが、文法事項の評価方法の必要性も感じた。

A 教諭は生徒が面白い内容の文章を書いてくことや絵を見て内容を書くようなタスクを楽しんで取り組むことに気づいた。しかし、授業では文法事項の説明や練習問題も行う必要があり、毎回タスクを与えられるわけではないため、月1 回程度のタスクで生徒の英語力が本当に向上するか疑問を感じていた。教科書選定の際に、タスクの種類や数を考慮して選ぶことはなかった。評価に関しては教師間での評価基準のすり合わせが難しいと感じた。「英検 Can-do リスト」を意識して到達目標やタスクおよび評価を考えたことはなかった。

5.3.2 事例 2

県立工業高等学校・1 学年・1 クラスの生徒数40 名程度・英語表現 I

教科書：Vision Quest English Expression I Standard (啓林館)

生徒の英語のレベル：英検 4 級～3 級

B 教諭は普段ペアやグループ活動中心の授業を行った。例文を暗唱させたり、練習問題をさせるなど文法を定着させる活動の他、タスクにも多く取り組ませた。自己表現のタスクでは、個人で考えさせた後にペアで意見交換をさせた。Show & Tell のタスクも行い、生徒が自分で持ってきた絵などを見せながらペアの相手に紹介させた。

授業では、教科書の各レッスンにある「Use it!」をタスクとして用いたが、修正して行うこともあった。例えば、使用教科書にある「あなたの学校の規則を3 つ書いてみよう」(p.39) では、「あなたの理想の学校の規則」として、生徒がさまざまな意見を言いやすいように変更した。授業中は生徒個人や生徒同士でパフォーマンスを評価させた。定期試験では社会の規則とそれがある理由を書かせるタスクを出題し、教師が評価した。評価基準を「学習到達目

■ 表 1：学習到達目標達成を評価するための Rubric

	evaluation	A	B	C	Total score	
内容	内容的につながっているか	(つながりが明確で面白い：4点)	(つながりがある：2点)	(つながりがない：0点)	/4	/10
構成	英文が3つ書けているか	(3文より多く書けた：4点)	(3文：2点)	(3文未満：0点)	/4	
言語	助動詞の機能が生かされた英文が書けているか(助動詞の意味や、後の動詞が原形になっているか)		(いる：2点)	(いない：0点)	/2	

標達成を評価するための Rubric」とし、上記の授業内でのタスクに関しては以下のシートを用いた(表1)。

授業では、「Use it」のタスクをグループで発表させ、グループで最も評価の高かった人にクラス全体で発表させた。生徒の自己評価では、生徒間で評価の仕方にずれがあり、評価方法や観点を教師が指導する必要性を感じた。また、自己評価や他者評価は生徒に「自分は英語ができるかもしれない」と自信をつけさせる上で重要だと感じた。教師が評価した場合はフィードバックを与え、文法項目についてのコメントではなく、精神面や動機づけのために形成的な評価をした。

B 教諭は「英検 Can-do リスト」を意識することはなく、所属する県から求められている学習到達目標のあり方を参考にし、アウトプット活動を評価する方法を探究した。また、タスクは生徒の実生活に近いものを与えるべきと考えており、学校生活や芸能人、歌など、どの生徒にも共通の話題となり得る内容を扱う必要があると感じた。教科書を選ぶ際は、文法項目の難易度を判断材料にしていたが、タスクはアウトプットの楽しさを伝え、自ら学ぶ学習者に育てる際に重要な役割を果たすことに気づき、今後はタスク活動も判断材料にしたいと感じた。

5.4 考察

2名の教諭およびALTは教科書内のライティングのタスクを修正して使用したことがわかった。両教諭はタスクの内容を生徒の身近な生活と関連するものに修正した。さらに、評価基準を使用することで、何を目標とするタスクなのかを明らかにして生徒に示した。インタビュー当時「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標を作成中であったため、タスクの評価基準が年間の学習到達目標にどのように位置づけられるかについては明らかにできなかった。

A 教諭が授業で生徒に与えた実際のタスク(資料3)はお気に入りのものや人物を紹介する内容である。教科書には好きなものを書くタスクがある。これは「英検 Can-do リスト」では3級の「自分のことについて簡単な文章を書くことができる」に相当する。この「簡単な文章」というレベルは、実際の授業で行ったタスクになると40 words程度で示されている。また作成したタスクの話題は自分の好きなものや好きな人物であり、教科書のタスクと同じものであるが、指示文の中に具体的な例(映画、本、色、人物など)を挙げ、アイディアが浮かびやすくなる工夫がされている。さらに、教師がフィードバックという形で生徒のメッセージに応答することから、コミュニケーションの要素も含まれている。

B 教諭は、教科書の「Use it」を修正してタスクを作った。「あなたの学校の規則を3つ書いてみよう」という指示を「あなたの理想の学校の規則を書こう」に修正し、さまざまな意見が出やすいタスクにした。さらに、クラスメートと意見交換する機会も与えたためコミュニケーションの要素もあった。「あなたの学校の規則」であれば、同じ学校に在籍する生徒が考える文はほとんど同じになるため、情報をクラスメートと交換する必要性がなくなる。本研究の調査1ではこの「Use it」はタスク化の可能性があるという基準で「タスク」としてカウントした。また、このタスクは「自分の学校」という話題を含んでいるため、「英検 Can-do リスト」の2級の「まとめ表現」である「日常生活での話題についてある程度まとまりのある文章を書くことができる」の下位項目「自分の学校(会社)を紹介する簡単な文章を書くことができる」と関連すると判断した。調査1の「話題」を観点とした分類方法に従うと、このタスクは2級のレベルとなる。しかし、話題は2級相当であっても「規則を3つ書く」という行動のレベルは2級相当ではなく、3級や準2級の

「まとめ表現」にある「簡単な文章」のレベルになると考えられる。「英検 Can-do リスト」の各級で扱う話題とタスクの話題が一致しても、「どの程度できるのか」というレベルが異なることがある。タスクを修正し、パフォーマンスの評価基準を作ることと話題と行動のレベルを「英検 Can-do リスト」と一致させることが可能である。

6

結論と教育的示唆

本研究では新課程版高校英語検定教科書における「英検 Can-do リスト」と関連のあるタスクと評価を調査した。調査1から、教科書内の「書く」タスクと「話す」タスクのほとんどが「英検 Can-do リスト」に相当することがわかった。これらのタスクを授業で定期的実施することで、生徒に英検取得者の技能をイメージさせることが可能である。また、教科書間で差はあるが、準1級レベルのタスクが「コミュニケーション英語Ⅰ」に比較的多く含まれていることも明らかとなった。この科目が多くの高校の1年次に履修されることを考えると、実際の生徒の能力がタスクの難易度に追いつかない場合もあるため、教科書の選定やタスクの難易度の調整を教師は注意深く行う必要がある。

調査2では、タスクをどのように修正しているかを調べた。2件の事例から、教科書のタスクは話題と評価基準の修正により、生徒の実生活や英語力に合った難易度に変えられることがわかった。さらに、タスク化が可能な自己表現の課題は、ペアやグループ活動などの学習スタイルの設定や話題の修正次第で、言語を使う目的や情報の差が生じ、コミュニケーションの要素のあるタスクになることもわかった。また、「英検 Can-do リスト」の下位のCan-do項目と教科書内のタスクを照らし合わせてみると、両者の話題は一致しても、達成すべき行動のレベルが一致しないものがあった。「英検 Can-do リスト」を評価基準として参考にする場合は、リストに合わせて話題や行動のレベルを修正してパフォーマンスの評価基準を設定する必要がある。ただし、「英検 Can-do リスト」に合わせて修正した

評価基準であっても、外部試験である英検の採点基準と異なる可能性があるため、タスクを使用した言語活動を単純に英検の対策と考えることはできない。

最後に、学習到達目標としての評価規準やパフォーマンスの評価基準の設定方法を提案する。学習到達目標としての評価規準では、到達のレベルとして具体的な数値を入れず、「英検 Can-do リスト」のように解釈に幅のある表現を使用することが多い。しかし、生徒の英語力を評価規準に則って評価するためには、タスクを与えパフォーマンスを評価する必要がある。そのためには教員間でパフォーマンスの目標レベルに関する意見を一致させ、統一した測定用の評価基準を作成しなければならない。例えば、英語教育現場では目標レベルとして「英文が～文以上書ける・話せる」という考え方や表現がよく使われ、本研究のタスク分類や2件の事例でも産出する英文量が観点として取り入れられた。生徒も産出する英文量であれば客観的な自己評価が可能であり、多くの英文を産出できることで達成感を得ることができる。パフォーマンスの評価基準には、内容の一貫性や文章の結束性、語彙や文法の正確さなども観点として盛り込むことが必要となるが、生徒自身が理解でき、自己評価や相互評価で使用できるような基準を示すことで指導に役立てることができると考えられる。

謝辞

研究の機会を与えてくださいました公益財団法人日本英語検定協会の皆様、選考委員の先生方に厚くお礼申し上げます。とりわけ大友賢二先生には、ご助言や励ましのお言葉を賜りましたこと心より感謝申し上げます。また、新潟県の2名の先生方はお忙しい中、快くインタビューに応じてくださいました。厚く感謝申し上げます。本研究を行うにあたって奈良県、新潟県、長野県の多くの先生や大学院生の方々にご協力いただきました。本当にありがとうございました。

〈共同研究者〉

長岡工業高等専門学校 講師 大森理聡

参考文献 (*は引用文献)

- * Dörnyei, Z. (2007). *Research Methods in Applied Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Ellis, R. (2003). *Task-based Language Learning and Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- * 時事通信社. (2013). 『内外教育』第6221号.
- 国際交流基金. (2010). 『JF 日本語教育スタンダード 2010 利用者ガイドブック第二版』. Retrieved from https://jfstandard.jp/pdf/jfs2010_all.pdf
- * 松村昌紀. (2012). 『タスクを活用した英語授業のデザイン』. 東京：大修館書店.
- * 文部科学省. (2010). 『高等学校学習指導要領解説外国語・英語編』. 東京：開隆堂.
- * 文部科学省. (2011). 『国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言と具体的施策～英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて～』. Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf
- * 文部科学省. (2013). 『各中・高等学校の外国語教育に
おける『CAN-DO リスト』の形での学習到達目標設定のための手引き』. Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2013/05/08/1332306_4.pdf
- * 日本英語検定協会. (2006). 『英検 Can-do リスト』. Retrieved from <http://www.eiken.or.jp/eiken/exam/cando/list.html>
- * 高島英幸 (編著). (2005). 『文法項目別英語のタスク活動とタスク—34 の実践と評価』. 東京：大修館書店.
- * 竹村雅史. (2008). 『英検 Can-do リストによる Writing 技能に関する妥当性の検証—準 2 級と 3 級のリストを用いて—』. *STEP BULLETIN*, vol.20, 251-261.
- * 臼田悦之. (2009). 『英検 Can-do リストのスピーキング分野における Can-do 項目の妥当性検証』. *STEP BULLETIN*, vol.21, 263-273.
- 臼田悦之・志村昭暢・横山吉樹・山下純一・中村洋. (2009). 『教科書におけるスピーキング活動のタスク性に関する分析：中学校英語教科書の場合』. 『北海道英語教育学会紀要』9, 17-32.

資 料

資料 1：教科書一覧

「コミュニケーション英語Ⅰ」

No.	出版社	教科書名
1	東京書籍	All Aboard! Communication EnglishⅠ
2	東京書籍	Power On Communication EnglishⅠ
3	東京書籍	PROMINENCE Communication EnglishⅠ
4	開隆堂出版	ENGLISH NOWⅠ
5	開隆堂出版	Discovery EnglishⅠ
6	三省堂	CROWN English CommunicationⅠ
7	三省堂	MY WAY English CommunicationⅠ
8	三省堂	VISTA English CommunicationⅠ
9	教育出版	New ONE WORLD CommunicationⅠ
10	開拓社	On Air English CommunicationⅠ
11	大修館	Compass English CommunicationⅠ
12	大修館	Genius English CommunicationⅠ
13	啓林館	ELEMENT English CommunicationⅠ
14	啓林館	LANDMARK English CommunicationⅠ
15	数研出版	POLESTAR English CommunicationⅠ
16	数研出版	BIG DIPPER English CommunicationⅠ
17	数研出版	COMET English CommunicationⅠ
18	文英堂	UNICORN English CommunicationⅠ
19	文英堂	Grove English CommunicationⅠ
20	増進堂	MAINSTREAM English CommunicationⅠ
21	増進堂	NEW STREAM English CommunicationⅠ
22	第一学習社	Perspective English CommunicationⅠ
23	第一学習社	Vivid English CommunicationⅠ
24	桐原書店	PRO-VISION English CommunicationⅠ
25	桐原書店	WORLD TREK English CommunicationⅠ
26	CHEERS	ATLANTIS English CommunicationⅠ

「英語表現Ⅰ」

No.	出版社	教科書名
27	東京書籍	NEW FAVORITE English ExpressionⅠ
28	三省堂	CROWN English ExpressionⅠ
29	三省堂	MY WAY English ExpressionⅠ
30	教育出版	New ONE WORLD ExpressionⅠ
31	開拓社	MONUMENT English ExpressionⅠ
32	大修館	Departure English ExpressionⅠ
33	啓林館	VISION QUEST English ExpressionⅠ Advanced
34	啓林館	VISION QUEST English ExpressionⅠ Standard
35	数研出版	POLESTAR English ExpressionⅠ
36	数研出版	BIG DIPPER English ExpressionⅠ
37	文英堂	UNICORN English ExpressionⅠ
38	文英堂	Grove English ExpressionⅠ
39	増進堂	MAINSTREAM English ExpressionⅠ
40	第一学習社	Perspective English ExpressionⅠ
41	第一学習社	Vivid English ExpressionⅠ
42	三友社出版	COSMOS English Course 英語表現Ⅰ
43	スクリーン プレイ	SCREENPLAY English ExpressionⅠ

資料2：「英検 Can-do リスト」の4級～準1級の「話す」と「書く」技能

4 級

話す	簡単な文を使って話したり、質問をすることができる。
	・簡単な自己紹介をすることができる。(名前, 住んでいるところ, 家族など)
	・簡単な質問をすることができる。(時刻, 好きなもの, 相手の名前など)
	・相手の言うことがわからないときに、聞き返すことができる。(例: Pardon? / Could you speak more slowly?)
	・日付や曜日を言うことができる。
書く	簡単な文やメモを書くことができる。
	・短い文であれば、英語の語順で書くことができる。(例: I went to the park yesterday.)
	・語句を並べて短いメモを書くことができる。(例: birthday party at 6 p.m.)
	・文と文を接続詞 (and / but / so / when / because など) でつなげて書くことができる。
	・日付や曜日を書くことができる。

3 級

話す	身近なことについて簡単なやりとりをしたり、自分のことについて述べるができる。
	・自分の好きなことについて、短い話をすることができる。(趣味, クラブ活動など)
	・物ごとの「好き」「嫌い」とその理由を簡単に述べるができる。(動物, 食べ物, スポーツなど)
	・日常生活の行動について言うことができる。(例: I got up at seven. / I ate some bread for breakfast.)
	・自分の予定を簡単に言うことができる。(例: I'm going to meet my friends.)
	・簡単な頼みごとをすることができる。(例: Can you open the window, please?)
	・身近なことで相手を誘うことができる。(例: Let's go to a movie tonight.)
	・簡単な相づちを打つことができる。(例: I see. / Really?)
書く	自分のことについて簡単な文章を書くことができる。
	・簡単な自己紹介の文章を書くことができる。(名前, 住んでいるところ, 家族など)
	・自分の趣味について、書くことができる。
	・物ごとの「好き」「嫌い」とその理由を書くことができる。(食べ物, スポーツ, 音楽など)
	・短い日記を書くことができる。(1文から3文程度)
	・簡単なカードやはがきを書くことができる。(誕生日カード, 旅行先からの絵はがきなど)
	・短い伝言を書くことができる。(例: Ken called at 3 p.m.)

準2 級

話す	日常生活で簡単な用を足したり、興味・関心のあることについて自分の考えを述べるができる。
	・興味・関心のあることについて、自分の考えを述べるができる。(好きなスポーツ, 趣味に関することなど)
	・自分の将来の夢や希望について、話すことができる。(訪れたい国, やりたい仕事など)
	・自分の気持ちを表現することができる。(うれしい, 悲しい, さびしいなど)
	・簡単な約束をすることができる。(会う場所や時間など)
	・ファーストフード・レストランでメニューを見ながら注文をすることができる。(食べ物, 飲み物, サイズなど)
	・電話で簡単な表現や決まり文句を使って応答をすることができる。(例: Please wait a moment. / Hold on. / Speaking.)
書く	興味・関心のあることについて簡単な文章を書くことができる。
	・自分の将来の夢や希望について、書くことができる。(訪れたい国, やりたい仕事など)
	・自分のお気に入りのもの, 身近なものを紹介する簡単な文章を書くことができる。(自分のペット, 好きな本など)
	・短い手紙 (Eメール) を書くことができる。(友達やペンフレンドへの簡単な手紙など)
	・簡単なお知らせを書くことができる。(パーティーの日時や場所, 文化祭の日程など)
	・簡単な予定を手帳やカレンダーなどに書き込むことができる。(例: Meet Yoko at the station at ten / Go shopping with Jill)

2 級

話す	日常生活での出来事について説明したり、用件を伝えたりすることができる。
	・ 日常生活の身近な状況を説明することができる。(遅刻や欠席の理由など)
	・ 印象に残った出来事について、話すことができる。(旅行、イベントなど)
	・ 自分の学校(会社)について、簡単な紹介をすることができる。(場所、人数、特徴など)
	・ 簡単な道案内をすることができる。(例: Go straight and turn left at the next corner.)
	・ 買い物で店員に欲しいものや好みを伝えたり、簡単な質問をすることができる。(色、サイズ、値段など)
	・ 簡単な伝言をすることができる。(例: Tell Jane to call me back. / Tell John I can't go to the meeting today.)
書く	日常生活での話題についてある程度まとまりのある文章を書くことができる。
	・ 印象に残った出来事について、その内容を伝える文章を書くことができる。(学校行事、旅行など)
	・ 自分の学校(会社)を紹介する簡単な文章を書くことができる。
	・ 住んでいる地域を紹介する簡単な文章を書くことができる。
	・ 自分が読んだ本や見た映画について、自分の感想を書くことができる。
	・ ある程度の長さの手紙(Eメール)を書くことができる。(ホームステイ先や友達への近況報告など)

準 1 級

話す	社会性の高い話題について、説明したり、自分の意見を述べたりすることができる。
	・ 調べたことについて、まとまりのある話をするすることができる。(課題の発表、仕事のプレゼンテーションなど)
	・ 自分の仕事や専門分野に関する講義や発表などを聞いて、それについて質問したり自分の考えを述べたりすることができる。
	・ 商品やサービスについて、苦情を言うことができる。(商品の故障、サービスの内容など)
	・ 公共の施設で簡単な用を足すことができる。(郵便局で手紙を出す、図書館で本を借りるなど)
	・ 病院などで健康状態を伝えることができる。
	・ 簡単な内容であれば、電話で用を足すことができる。(歯医者や美容院の予約など)
	・ 読んだ本や見た映画について、そのあらすじを述べるすることができる。
書く	日常生活の話題や社会性のある話題についてまとまりのある文章を書くことができる。
	・ 興味・関心のあることについて、説明する文章を書くことができる。(簡単なレシピ、器具の使い方など)
	・ 興味・関心のある話題について、聞いたり読んだりした内容の要約を書くことができる。(講義の内容、雑誌や新聞の記事など)
	・ 日常生活の身近な話題について、自分の考えや意見を書くことができる。([食事と健康] など)
	・ 日本の文化について紹介する簡単な文章を書くことができる。(食べ物、祝日、お祭りなど)
	・ 自分がやりたいと思っていることの説明や理由を書くことができる。(留学や入社の志望動機など)
	・ 自分の仕事や専門分野の内容であれば、注文や問い合わせに対して簡単な返事を書くことができる。

資料3：事例1におけるライティングタスク

Prompt 2 May

deadline: May 31st (Fri.)

(しめし)

Tell me about your favorite thing. I want you to choose one thing that you like the most and write about it. It can be your favorite movie, your favorite book, your favorite color, or your favorite person (or your favorite something else, anything is OK). You must choose one specific thing and write about it. (ex. One Piece Mangas) 40-50 Words

Write a journal responding to the prompt above. Make sure to read the whole prompt and answer each part. You'll be marked for length and content. Remember to push the limits of your English and have fun. 長し 内容

My favorite sport is table tennis. I ~~was~~ played table tennis when I was junior high school student. It is interesting for me to play it. And I have long player. He is very strong. I want to be a like him. So I am practicing hard ever day.

My favorite animation is DRAGON BALL.
Son Goku is very good character. He doesn't give up.
A person of iron will. And he is a very kind.
Son Goku ~~is~~ makes me happy. I will see a DRAGON BALL many times.

I like Dragon Ball, too. But Dragon Ball Z is my favorite. Gohan is my favorite character, especially 89 words) during the Cell Games.

Class No.

Name

Length

5

/ 5

+

Content

5

/ 5

=

Grade

10

/ 10